

宗匠 鶴崎 裕雄・執筆 末吉 洋子

賦 何路 連 歌

初折表

発句 ときは今あめがしたしる五月哉 明智 光秀
 脇句 麒麟飛ぶごと高き夏雲 豆谷 浩之
 三 草の戸に結びし夢もかなふらん 大江田 妙子
 四 友なる櫺はじのまた赤きころ 光田 和伸
 五 終へし田に深き露置く村はづれ 鶴崎 裕雄
 六 渡るせせらぎ鳴きまさる虫 藤江 正謹
 七 夜をこめて月の光はさやかなり 小村 典央
 八 みなれ衣を錦にもせむ 大村 敦子

一 旅の路矢立たづさへいざ行かむ 松本 充弘
 二 越ゆる峠に駒はいななき 木下 貴司
 三 かき曇るにはかの雨を堪へしのび 末吉 洋子
 四 片敷く袖のさびしきばかり 典央
 五 をりをりの君が玉章かひなくて 康代

六 うすき薫りに思ひも消えぬ 靖大
 七 せめてもの憐みたまへ石仏 教美
 八 凍て空にただ定まらぬ雲 恭子
 九 狩りくらし交野の夕べ小雪舞ふ 亜樹
 十 昔語りに酒くみ交はす 規子
 十一 故郷は実りことほぐ笛太鼓 尚文
 十二 粧ふ山をくだる柚人 寛司
 十三 たぎつ瀬を影に沈めて月のぼる 正謹
 十四 中空とほく雁のこゑ 善帆

初折裏

一 風にきく里のかをりを知るらめや 小林 康代

名残裏

二 ここぞ名高き歌枕なる 山村 規子

一 負へる荷をおくべき折をかたまけむ 敦子

三 山にだに妹背の中はあるものを 竹島 一希

二 時はえならず和やかに過ぐ 充弘

四 たぎつし心身に余しつつ 竹地 亜樹

三 夕涼み笑ひこぼれぬうちもなし まゆみ

五 爪弾けば引目かぎ鼻なに思ふ 小林 善帆

四 いづこより風竹揺らすらん 正純

六 齢とともにふりし種々 中 教美

五 かにかくに後ふりかへる長き道 直美

七 初雪に枯野の色も消えゆきて 斎藤 尚文

六 かすみ初めたることの嬉しさ 一希

八 ますますに続く小さき足跡 梶野 恭子

七 城ひとつ残し裾濃すそじに花のいろ 和伸

九 海猫のたゆたふ波に月涼し 藤江 寛司

挙 杭全の春に香る楠 洋子

十 たこもくらげも静かに眠り 増田まゆみ

句上

十一 扇持ち参りたまへる中納言 御手洗 靖大

光秀 一 典央 二 善帆 二 靖大 二

十二 歌の館に急ぐこの春 裕雄

浩之 一 敦子 二 教美 二 正純 二

十三 神おほへ花もて御国安らけく 西田 正純

妙子 一 康代 二 尚文 二 直美 二

十四 東風吹く先に幸のあるらん 大利 直美

和伸 二 規子 二 恭子 二 充弘 二
 裕雄 二 一希 二 寛司 二 貴司 一
 正謹 二 亜樹 二 まゆみ 二 洋子 二